新学術第6班後援研究会

- 日　時：2012年12月8日（(土）13:00－19:00
- タイトル：「ユーラシア地域大国における聖地の研究」第一回研究会
- 場　所：新潟国際情報大学中央キャンパス
- プログラム

13:00 趣旨説明（杉本良男）

13:15 「『季刊民族学』「文化遺産を再見する」をめぐって」高橋沙奈美（筑波大）

15:00 「文明の交差点における歴史の現在」 桜間　瑛 （北大）

16:15 総合討論

17:30 今後の研究の方向性をめぐって

「趣旨説明」杉本良男（第 6 班、国立民族学博物館）

本研究会は、新学術領域「比較地域大国論」第 6 班「地域大国の文化的求心力と遠心力」において 2012 年 3 月 3 日（土）・4 日（日）に開催された研究会「生活空間、場の記憶、ジェンダー、探偵小説―ユーラシア比較文化の試み」第3セッション「世界遺産は誰のもの？―ポリティクス・記憶・表象」を発展させて、コメンテーターをつとめた杉本良男（国立民族学博物館）の提唱で組織されたものである。

メンバーは、3 月に発表者をつとめた高橋沙奈美（筑波大）、前島訓子（名古屋大）、小林宏至（首都大東京）に、松尾瑞穂（新潟国際情報大）、桜間瑛（北大）、川口幸大（東北大）を加えて 7 名で発足した。新学術領域の枠組みをうけて、ロシア（高橋、桜間）、中国（小林、川口）、インド（前島、松尾）を専門とする気鋭の研究者と総括にあたる杉本という役割分担で、いずれも宗教からの視点ではなく、地域、社会を基点にした研究を行っている研究者で構成している点が特徴である。

今回は第 1 回研究会として、全体の趣旨説明、『季刊民族学』誌の特集「文化遺産を再見する」についての総括、そして桜間によるロシア、カザンのクレムリンに関する報告が行われた。残念ながら時間の都合でインド関連の報告は割愛せざるを得なかった。その後、今後の研究の進め方について討論を行った。発表の概要は個別に紹介されるが、ここでは、本研究会の全体の趣旨について若干の説明をしておきたい。

「聖地」に関する議論は多岐ににわたるが、宗教社会学、宗教学などでは「聖俗論」の文脈でとくに「聖性」をめぐって行われてきたほか、社会人類学的な「巡礼論」の文脈で構造－反構造論の枠組みで展開されてきた。さらに、20 世紀末からの高度消費社会化、高度情報化、グローバル化などの進展に伴い、聖地の消費、ユネスコ主導の文化遺産指定、観光化などをめぐる政治経済学的研究が要請されている。

本研究会では、①高度情報化時代に入り、聖地のもつ物質性、身体性、実体性などのリアリティとヴァーチャルな宗教実践との関係が問題にされなければならない状況にあること、さらには、②「地域大国」が西欧近代的な政教分離主義を原則とする宗教概念・実践において、宗教そのものが否定されたり（ロシア、中国）、西欧的な国家と教会との分離ではなく政治と宗教そのものを分離しようとする厳密な政教分離主義を実践していたり（インド、日本）、する意味でいわば「周縁的」な位置にあることを前提として議論をすすめる必要があると考えている。